

## メソアメリカにおける巨石人頭像と大型人頭像

伊 藤 伸 幸

### はじめに

巨石人頭像はオルメカ文化を代表する巨大石彫の一つである。一方、メソアメリカ南東部太平洋側でも、人の頭部よりも大きな人頭像がみつまっている<sup>1</sup>。

巨石人頭像に関する記録は1869年の記事が初めてである。メルガーは、1862年にサン・アンドレス・トゥクストラを訪問し、巨石人頭像が数年前<sup>2</sup>にみつかったことを知ったと述べている。発見の状況を次のように記している。農民がひっくり返ったフライパンの底のようなものを見つけ、農園主に知らせた。彼は掘り出すことを命じたところ、この巨石人頭像を見つけたとしている。しかし、その重要性は認識していなかった。彼はまたその特徴がエチオピア人に似ており、ネグロイドがいた証拠であると記している (Melgar, 1869)<sup>3</sup>。その後、1925年にブロムとラ・ファルジェが踏査を行ったときに、ラ・ベンタ遺跡で巨石人頭像である1号記念物をみつけている (Blom and La Farge, 1986)。1938年にスターリングが調査を行うまで、巨石人頭像に関する発掘調査は実施されていない (Stirling, 1939)。スターリングらはトレス・サポテス遺跡、ラ・ベンタ遺跡、サン・ロレンソ遺跡を発掘調査し、巨石人頭像を報告している (Coe and Diehl, 1980 ; Drucker, 1943, 1952 ; Drucker, *et al.*, 1959 ; Stirling, 1943, 1955)。また、最後に発見された巨石人頭像は、1994年5月3日にサン・ロレンソ遺跡で出土した89号記念物 (10号巨石人頭像) である (Cyphers, 1994)。合計すると17基の巨石人頭像が確認されている。

一方、オルメカ文化において巨石人頭像に注目した研究には以下のようなものがある。クレウロウらは、巨石人頭像を詳細に観察し、6群に分けている。ラ・ベンタ、サン・ロレンソ、トレス・サポテスの順に古いのが、総ての巨石人頭像は大体同時期としている (Clewlow, *et al.*, 1967)。さらに、オルメカ文化の石彫を共通要素に基づいて分類と編年を試みている。巨石人頭像については、ラグナ・デ・ロス・セロス、サン・ロレンソ、ラ・ベンタの順に古いと考えた (Clewlow & William, 1974)。巨石人頭像を細部まで分類しているが、巨石人頭像の編年する際に、自分の分類基準を過大評価している可能性がある。また、発掘資料を編年に取り入れていない。デ・ラ・フエンテは巨石人頭像には3様式あると考えている。オルメカ文化の重要な3遺跡

<sup>1</sup> 以下では巨石人頭像と区別するために、大型人頭像とする。また、この小論では人頭部の厚みなく、平たい大型仮面となる石彫も含めない。出土地不明の大型人頭像や人頭部の下や横に杭若しくは棒状部分がつく石彫も扱わない。

<sup>2</sup> スターリングは1858年と、デ・ラ・フエンテは1953年と述べている (Stirling, 1939 ; de la Fuente, 1992)

<sup>3</sup> 現在、この巨石人頭像はトレス・サポテス記念物Aとして知られている。

のサン・ロレンソ、ラ・ベンタ、トレス・サポテスである。このうちでサン・ロレンソの巨石人頭像が最も古いとしている。また、サン・ロレンソの巨石人頭像群とラ・ベンタ巨石人頭像群は夫々の遺跡内で親類関係があるような似通った雰囲気を持っているとしている (De la Fuente, 1975, 1992)。この研究では、巨石人頭像に偏りすぎている。同時期若しくは次に続く時期の同じ特徴を持った石彫にも注意を向ける必要がある。

以上のことを踏まえて、この小論では、巨石人頭像のみでなく、同時期若しくは後に続く時期につくられたと考えられる石彫である大型人頭像も考察の対象とする。以下では、巨石人頭像と大型人頭像の時期、特徴とその意味について考察する。

## 1. 巨石人頭像と大型人頭像の時期

巨石人頭像若しくは大型人頭像は、人の頭よりも大きな人頭像である。この小論では、巨石人頭像を、ヘルメット状頭飾りと耳当てを持っている高さが145cm以上の人頭像とする。一方、大型人頭像は高さが145cm以下のものとする。トレス・サポテス記念物Qは巨石人頭像では最も低く145cmしかないが、頭飾りなどの特徴を考慮すると巨石人頭像に分類する方が妥当である。セロ・デ・ラス・メサス2号記念物は175cmの高さを持つが、ヘルメット状頭飾りや耳当てが無く、様々な装飾がされている点で、巨石人頭像と異なるため、大型人頭像とする。また、モンテ・アルト1, 3, 9号記念物は145cm以上の高さを持っているが、ヘルメット状頭飾りが無いことなどから、大型人頭像とする。高さがラグナ・デ・ロス・セロス1号記念物の75cmよりも小さいものは大型人頭像に含めない。

メキシコ湾岸ではサン・ロレンソ遺跡で10基、ラ・ベンタ遺跡で4基、トレス・サポテス遺跡で2基、コバタ遺跡では1基ある。17基の巨石人頭像が確認されている (図1)。セロ・デ・ラス・メサス、ラグナ・デ・ロス・セロス、アグアス・メディアス遺跡の人頭を象る石彫は巨石人頭像と比べると比較的小さい。この小論ではこれらを巨石人頭像ではなく大型人頭像とする。また、巨石人頭像が出土しているラ・ベンタ遺跡でも大型人頭像に相当する78号記念物が出土している。しかし、ラ・ベンタ遺跡出土以外の大型人頭像についてはオルメカ文化に属するかどうかについては不明である。一方、メソアメリカ南東部太平洋側では、タカリク・アバフ、モンテ・アルト遺跡やトナラ地区で大型人頭像が出土している。以下では、巨石人頭像と大型人頭像を考察する。最初に、巨石人頭像と大型人頭像の出土状況を検討し、次にこれらの石彫が属す時期を考察する。

### (1) 巨石人頭像

#### 1) トレス・サポテス遺跡 (Heizer, *et al.*, 1965; Stirling, 1943)

1号巨石人頭像 (記念物A): 第1群の南側にある建造物の正面に位置し、石の基礎の上に立っている。顔を北に向けていた。関連して出土した遺物については不明である (図2, 写真3.2)。

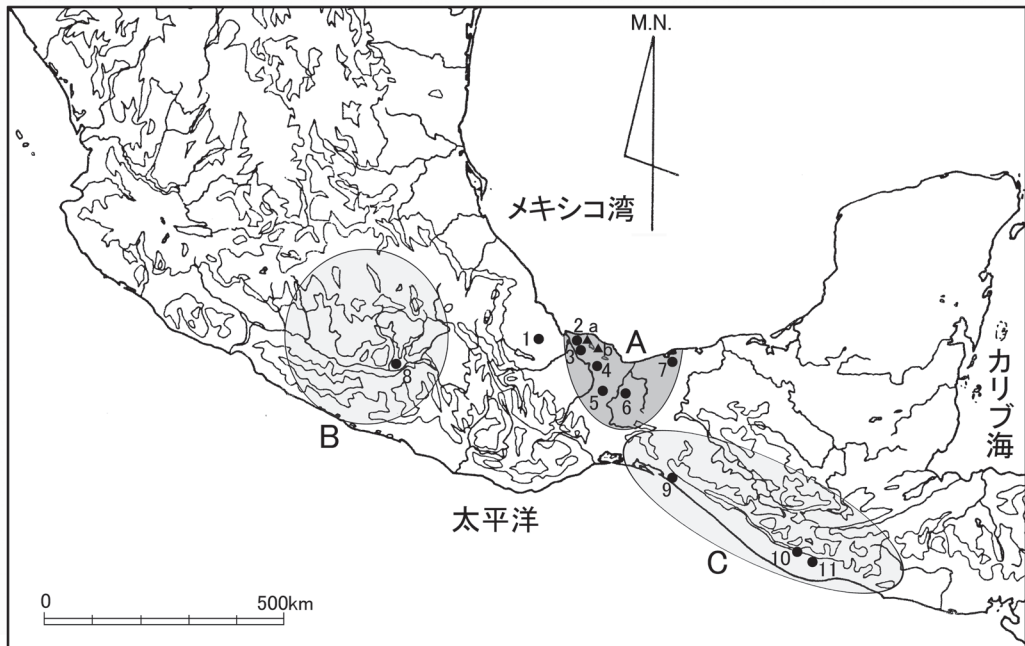


図1 巨石人頭像及び大型人頭像出土遺跡と石材の産地

A：メキシコ湾岸

1. セロ・デ・ラス・メサス、2. コバタ（=ビヒア山：石材の産地）、3. トレス・サポテス、4. ラグナ・デ・ロス・セロス、5. メディアス・アグアス、6. サン・ロレンソ、7. ラ・ベンタ

B：メキシコ中央部～ゲレロ州

C：メソアメリカ南東部太平洋側

8. テオバンティクアントラン

9. トナラ、10. タカリク・アバフ、11. モンテ・アルト

石材の産地：a. トゥクストラ山地、b. シンテベック山

2号巨石人頭像（記念物Q）：現在のトレス・サポテス村の北3kmにあるネスステペ山の平らになっているところで、顔を北に向けて埋まっていた。関連して出土した遺物については不明である（写真3.3）。

## 2) コバタ遺跡（De la Fuente, 1992）

ビヒア山の斜面から北向きに出土した。基部は表土から70cmのところにあった。口の辺りには黒曜石のナイフ状石器が内部にあった古典期後期のオレンジ色土器が出土した<sup>4</sup>（図1、写真3.1）。

## 3) サン・ロレンソ遺跡（Brügge y Hers, 1970；Coe and Diehl, 1980；Cyphers, 2004；Ruiz G., 1982；Stirling, 1955）

10基の巨石人頭像が出土している（図3）。谷底に落ちて出土している事例があるが、スターリングは侵略者が巨石人頭を崖下に落としたと考えている（Stirling, 1955）。コウは土砂崩れによって崖下に落ちたと考えている（Coe and Diehl, 1980）。巨石人頭像が形成する列は、2つ存在すると考える研究者もいる（De la Fuente, 1992）。

<sup>4</sup> デ・ラ・フエンテはオルメカ文化に属さないとしている（De la Fuente, 1992）。

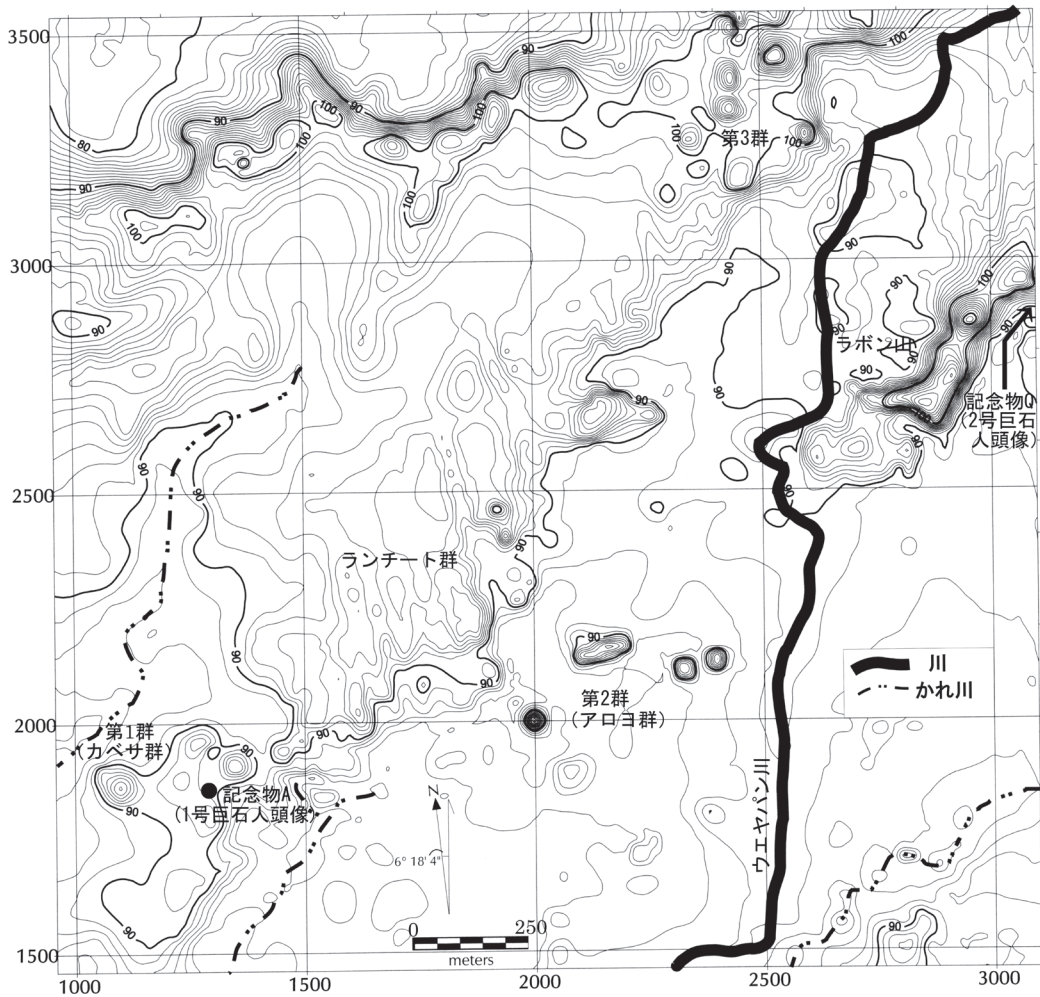


図2 トレス・サボテス遺跡と巨石人頭像 (Pool, 2003 を改変)

1号記念物（1号巨石人頭像）：南東部の谷状に落ち込み始める部分から出土した。近くから出土した遺物はパラングナ期（紀元前600–400年）に属する（写真1.1）。

2号記念物（2号巨石人頭像）：遺跡の北東部より、顔を上にして出土した。近くより、サン・ロレンソ期（紀元前1150–900年）とビジャ・アルタ期（紀元後900–1100年）の遺物が出土している（写真1.2）。

3号記念物（3号巨石人頭像）：南端の中央部から崖下を下がった所にある湧水点から出土した。出土遺物はサン・ロレンソ期とビジャ・アルタ期に属している（写真1.3）。

4号記念物（4号巨石人頭像）：北東部の崖状に下がる部分から出土した。サン・ロレンソ期とビジャ・アルタ期の遺物が出土した（写真1.4）。

表1 巨石人頭像と大型人頭像

石彫	大きさ (m)	頭飾り	耳当て	眉間の皺	眉	目	口	耳飾り
<b>巨石人頭像</b>								
トレス・サポテス								
A記念物	1.47×1.50×1.45	段 差	長 方 形	角 段	—	二 重?	閉 口	ラッパ状
Q記念物	1.45×1.34×1.26	房	長 方 形	角 段	—	二 重?	閉 口	ラッパ状
コバタ								
	3.40×3.00×3.00	段 差	長 方 形	角 段	—	半 目	閉 口	ラッパ状
サン・ロレンソ								
1号記念物	2.85×2.17×1.68	帯, 段差	長 方 形	左右隆起	—	二 重	閉 口	長 方 形
2号記念物	2.69×1.83×1.05	ト リ	台 形	左右隆起	—	二 重?	歯 4	方 形
3号記念物	1.78×1.60×0.95	縄, 段差	顎	棒 2	—	二 重	閉 口	—
4号記念物	1.78×1.17×0.95	縄, 房	顎	左右隆起	—	二 重	閉 口	円+勾玉
5号記念物	1.86×1.47×1.15	脚, 平行線	長 方 形	左右隆起	—	二 重	開 口	円+勾玉
17号記念物	1.67×1.41×1.26	ビ ー ズ	長 方 形	左右隆起	—	二 重	開 口	ラッパ状
53号記念物	2.70×1.85×1.35	紐	長 方 形	左右隆起?	—	二 重	歯 4	方 形
61号記念物	2.20×1.65×1.60	勾玉, 段差	台 形	左右隆起	—	二 重?	歯 6	円+勾玉
66号記念物	1.65×1.36×1.17	縄	台 形	左右隆起	—	二 重	開 口	ラッパ状
89号記念物	1.80×1.43×0.92	脚, ビーズ	顎, ビーズ	左右隆起	—	二 重	開 口	方 形
ラ・ベンタ								
1号記念物	2.41×2.08×1.95	帯	長 方 形	左右隆起	—	二 重	閉 口	方 形
2号記念物	1.63×1.35×0.98	勾 玉	長 方 形	左右隆起	—	二 重	歯 4	円+勾玉
3号記念物	1.98×1.60×1.00	ヘルメット	顎	左右隆起	—	—	開 口	方 形
4号記念物	2.26×1.98×1.86	脚, 平行線	長 方 形	左右隆起	—	二 重	歯 4	方 形
<b>大型人頭像</b>								
セロ・デ・ラス・メサス								
2号記念物	1.75×1.01×0.76	有	無	—	有	二 重?	歯	方 形
メディアス・アグアス								
1号記念物	0.90×0.63×0.47	無	無	無	無	空	歯, 牙	無
ラグナ・デ・ロス・セロス								
1号記念物	0.75×0.70×0.70	—	無	棒 2	無	方 形	歯, 牙	無
2号記念物	— × — × —	—	無	棒 2	無	方 形	歯, 牙	無
ラ・ベンタ								
78号記念物	0.92×0.74×—	無	無	—	有	半 目?	開 口	—
テオバンテクアニトラン								
石彫頭部	1.01×0.85×—	鏡 餅 状	—	—	無	—	開 口	円 形
トナラ								
	1.01×1.05×0.85	無	無	—	無	閉じた目?	開 口	無
タカリク・アバフ								
99号記念物	1.07×0.94×1.17	無	無	無	無	閉じた目	長楕円形	方 形
モンテ・アルト								
1号記念物	1.45×1.10×1.30	無	無	棒 2	無	閉じた目	長楕円形	無
2号記念物	1.27×1.43×1.40	無	無	角 段	無	—	長楕円形	有孔円形
3号記念物	1.47×2.00×1.80	無	無	角 段	無	—	長楕円形	有孔円形
5号記念物	0.91×1.65×0.88	無	無	棒 2	無	閉じた目	長楕円形	無
9号記念物	1.60×1.27×1.03	無	無	—	?	—	開 口?	無?

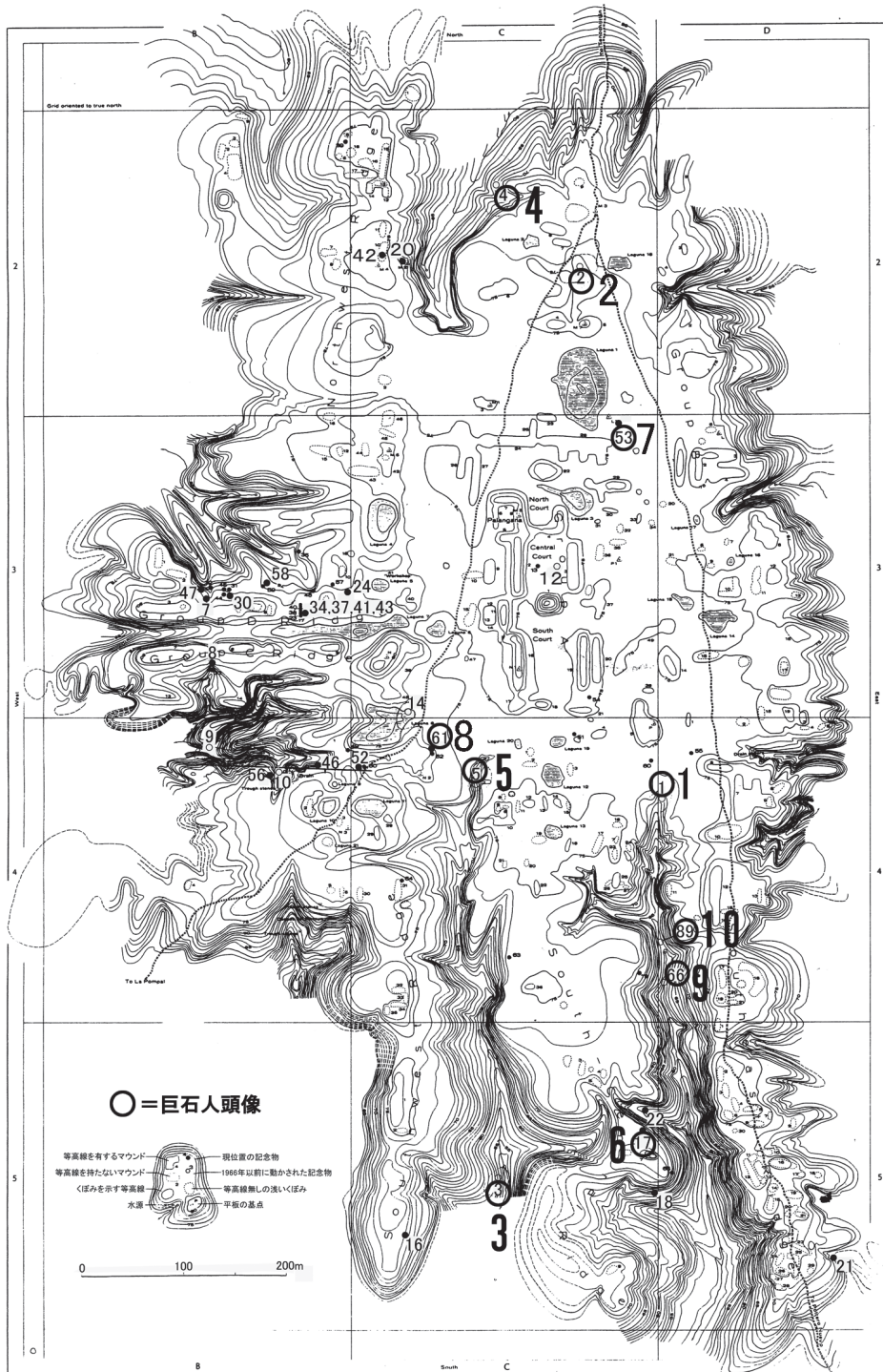


図3 サン・ロレンソ遺跡と巨人人頭像 (Coe and Diehl, 1980 を改変)

5号記念物（5号巨石人頭像）：南側の谷状に下がっていく部分から出土した（写真1.5）。

17号記念物（6号巨石人頭像）：南東端の崖状に下がっていく部分から出土した。近くからサン・ロレンソ期の土器や鉄鉱石のビーズが出土した（写真1.6）。

53号記念物（7号巨石人頭像）：7号沼の南東端近くで、顔を上にして出土した。関連して出土した遺物については不明である（写真1.7）。

61号記念物（8号巨石人頭像）：8号沼の南東の湧水点近く、サン・ロレンソ期の床面上から出土した（写真1.8）。

66号記念物（9号巨石人頭像）：湧水点のある谷の底から顔を上に向けて出土した。関連して出土した遺物については不明である（写真2.1）。

89号記念物（10号巨石人頭像）：9号巨石人頭よりやや北の同じ谷の底から出土した。関連して出土した遺物については不明である（写真2.2）。

#### 4) ラ・ベンタ遺跡 (Stirling, 1943)

1号記念物：南を向いて立っていた（図4、写真2.3）。

2, 3, 4号記念物：2, 3, 4号記念物とは東西方向に列を成して、北向きに立っていた。東から順に3, 2, 4の順に並んでいた（写真2.4~6）。巨石人頭像に関する発掘状況などは不明であるが、ラ・ベンタ遺跡は先古典期中期（紀元前1000-600年）に栄えた都市遺跡である。

### (2) 大型人頭像

#### 1) セロ・デ・ラス・メサス遺跡 (Stirling, 1943)

2号記念物：顔の部分を上にして出土した。後頭部にあたる部分には二人の人物が浮彫りされていた。時期などは不明である（写真3.6）。

#### 2) メディアス・アグアス遺跡 (Medellín Z., 1960)

1号記念物：モクテスマ山近くより出土している。遺跡出土の土器は古典期後期に属している（写真3.7）。

#### 3) ラグナ・デ・ロス・セロス遺跡 (Medellín Z., 1960)

1号記念物：26号建造物近く、中央広場近くの小広場から出土した。頭部中央の穴から先古典期の土器が出土した（写真3.4）。

2号記念物：1号記念物同様に頭頂部に直径約6cmの穴が開いている（写真3.5）。

#### 4) ラ・ベンタ遺跡 (Ochoa y Castro-Leal, 1986)

78号記念物：C建築複合の東側より出土している。出土状況などは不明である（写真2.7）。

#### 5) テオパンティクアニトラン遺跡 (Martínez D., 1985, 1986)

大型人頭像：3期（紀元前800-600年）につくられた建造物の一部として出土した（写真4.1）。

#### 6) トナラ地区

大型人頭像：トナラ地域から出土しているが、正確な出土状況などは不明である（写真4.2）。

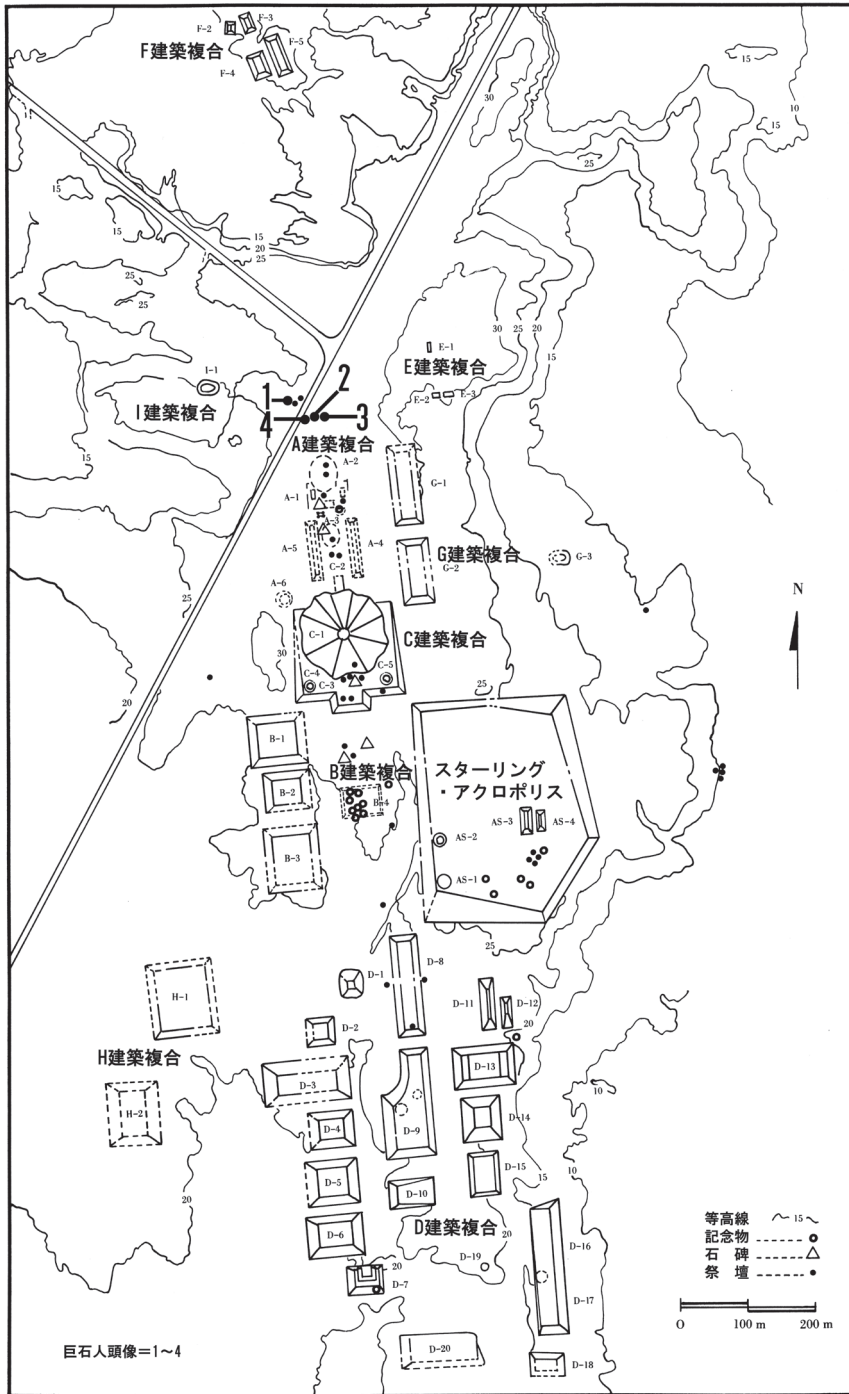


図4 ラ・ベンタ遺跡と巨石人頭像 (González L., 2004を改変)



#### 7) タカリク・アバフ遺跡 (Schieber y Orrego, 2001)

99号記念物：10号建造物の東側から出土した。先古典期後期とされる。太っちょの石彫の伝統を持っているとされる (写真4.3)。

#### 8) モンテ・アルト遺跡

4基の大型人頭像が出土している。時期は不明であるが、この遺跡から先古典期後期の土器が出土している。また、未製品若しくは人の頭部が彫られた自然石も出土している (写真4.4～8)。

### (3) 巨石人頭像と大型人頭像の時期

先古典期前期のオルメカ文化が栄える時期に、メキシコ湾岸で巨石人頭像がつくられ始めた。しかし、確実な時期としてはサン・ロレンソ遺跡のサン・ロレンソ期 (紀元前1200-900年) が最も早いことになる。また、先古典期中期 (紀元前900-400年) に属するラ・ベンタ遺跡でもつくられていたことから、先古典期前・中期に属しているといえる。一方、コバタ遺跡の巨石人頭像を、デ・ラ・フエンテは石彫様式などからオルメカ文化に属しないと考えている。後世につくられた可能性も否定できない。しかし、巨石人頭像に関する発掘調査はサン・ロレンソに限られていることもあり、時期決定に関しては慎重に考える必要がある。

大型人頭像はラ・ベンタ遺跡やテオパンティクアニトラン遺跡で見つかっている。先古典期中期にはつくり始めた可能性が高い。メキシコ湾岸、ゲレロ州とメソアメリカ南東部太平洋側に分布している。また、メソアメリカ南東部太平洋側では、大型人頭像が出土しているモンテ・アルト遺跡では先古典期後期の遺物が出土している。先古典期後期に属する可能性がある。

以上から考えると、巨石人頭像がつくられ始めた後に、遅れて大型人頭像がつくられた。また、出土した遺跡の発掘資料も考慮すると、巨石人頭像と大型人頭像は何らかの役割を古典期後期まで担っていた可能性がある。

## 2. 巨石人頭像と大型人頭像の特徴

### (1) 巨石人頭像と大型人頭像にみられる装身具

巨石人頭像には頭飾りなどが表現されている。一方、大型人頭像では、殆ど頭飾りは表現されておらず、禿頭のようにみえる。以下では、頭飾り、耳当て、耳飾りの順に検討する。

最初に、巨石人頭像17基にみられる頭飾りの特徴をみる。頭飾りは一般的にヘルメットののような形をしている。様々な文様がヘルメット状頭飾りに表現されている。ヘルメットの下部に頭を一周するように、帯状に鉢巻のような部分を持つものは、サン・ロレンソ遺跡では89号記念物以外の9基、ラ・ベンタ遺跡では浸食のため詳細が確認できない3号記念物以外の2基、トレス・サポテス遺跡2基、コバタ遺跡の1基にみられる。殆どが鉢巻状の部分を持っている。サン・ロレンソ1,2号記念物には鉢巻の後ろの部分に結び目が表現されている。サン・ロレンソ5,17,61号記念物、ラ・ベンタ2,4号記念物には、結び目がみられなく、鉢巻状部分は素面となっている。

後頭部が平らになって、彫刻部分が無く、結び目が確認されないのはサン・ロレンソ3, 4, 66記念物である。

ヘルメット状頭飾りに表現されている文様をみる。動物の一部を示しているのは、サン・ロレンソ2, 5, 89号記念物、ラ・ベンタ4号記念物の4基にみられる。サン・ロレンソ2号記念物は猛禽類の頭部正面が鉢巻状部分に3単位彫られている。他の3基は3本指の脚が表現されている。猛禽類の脚部とされる。サン・ロレンソ89号記念物とラ・ベンタ4号記念物は1単位が頭頂部から前頭部にかけて表現されている。しかし、サン・ロレンソ5号記念物には、3本指の脚が左右に2脚表現されている。一方、牙若しくは勾玉状の文様が、サン・ロレンソ61号記念物とラ・ベンタ2号記念物の鉢巻状部分に彫られている。先の尖った部分が下向きになっている。また、3単位の勾玉若しくは牙状の部分が表現されるのはラ・ベンタ1号記念物である。頭頂部と鉢巻部分がある部分より高くなっているのは、サン・ロレンソ1, 3, 61号記念物、トレス・サポテス記念物A、コバタ遺跡1基である。サン・ロレンソ3, 4, 66号記念物には縄が表現されている。しかし、3, 4号記念物では鉢巻状部分に水平に4列表現されており、66号記念物には鉢巻部分の両こめかみ辺りに鉢巻部分と他の部分を抑えるように縄2列が表現されている。房状の飾りが付いているのはサン・ロレンソ4号記念物、トレス・サポテス記念物Qである。前者は鉢巻状部分上3か所で留められた数条の房が垂れ下がり、後者は後ろの部分に房状部分が3つ垂れている。また、サン・ロレンソ53号記念物は後ろに数条の紐状部分が下がっている輪状の飾りがある。方形のビーズ状の表現がみられるのはサン・ロレンソ17, 89号記念物の2基である。サン・ロレンソ1号記念物とラ・ベンタ1号記念物では、頭頂から幅広の帯状部分が垂れている。ラ・ベンタ1号記念物は、鉢巻部分に三叉文様がみられる。平行する線でヘルメット部分が分けられているのはサン・ロレンソ5号記念物とラ・ベンタ4号記念物がある。

一方、大型人頭像では、テオパンティクアニトラン大型人頭像に頭飾りが表現されている。ベレー帽の様な頭飾りである。他には、メサ・デ・ロス・セロス2号記念物には頭頂から下に伸びる頭飾りがみられるが、ヘルメット状ではない。これらは夫々が特徴を持っており、同じ頭飾りが他にはみられない。

巨石人頭像のヘルメット状頭飾りの下端から左右の耳の前に、帯状に垂れている部分がみられる。このヘルメット状頭飾りに付属する耳あてのような部分に注目すると、単純な方形部分が耳の前に表現されるのは、サン・ロレンソ1, 2, 5, 17, 61, 66号記念物、ラ・ベンタ1, 2号記念物、トレス・サポテス遺跡の2基、コバタ遺跡1基が挙げられる。一方、顎まで下がっている耳あて部分は、サン・ロレンソ3, 4, 89号記念物、ラ・ベンタ3号記念物にみられる。サン・ロレンソ3, 4号記念物は縄状部分が顎のあたりまで垂れ下がり、89号記念物はビーズ状の列が顎まで伸びている。ラ・ベンタ3号記念物の耳あて部分の詳細は不明である。

耳飾りをみると牙若しくは勾玉状部分が下に付いている円形部分が、サン・ロレンソ4, 5, 61号記念物、ラ・ベンタ2号記念物に浮彫りされている。ラップ状耳飾りは、サン・ロレンソ17,

66号記念物とトレス・サポテス遺跡2基とコバタ1基である。方形の耳飾りが下がっているのは、サン・ロレンソ2, 53, 89号記念物、ラ・ベンタ1, 3, 4号記念物である。方形耳飾りの大半が輪状に表現されている。ラ・ベンタ1, 4号記念物の耳飾りには十字文や星状文様がみられる。長方形の耳飾りはサン・ロレンソ1号記念物である。

一方、大型人頭像では、セロ・デ・ラス・メサス、テオパンティクアニトラン、モンテ・アルト、タカリク・アバフ遺跡とトナラ地区出土大型人頭像で耳飾りがみられる。テオパンティクアニトラン大型人頭像は、円形の耳飾りが表現されている。他では、巨石人頭像にみられるような方形の耳飾りらしきものが彫られている。

巨石人頭像には表現がみられない大型人頭像のみの装身具として、鼻飾りがある。セロ・デ・ラス・メサス2号記念物には、鼻の下に鼻飾りの様な表現がみられる。この表現は、モンテ・アルト9号記念物でもみられる。しかし、モンテ・アルトの場合には口を表現している可能性も否定できない。

## (2) 巨石人頭像と大型人頭像の表情

巨石人頭像と大型人頭像の顔の特徴を検討する。巨石人頭像は基本的に写實的に細部まで表現されている。しかし、コバタの巨石人頭像は唯一写実性が欠けている。また、大型人頭像は、簡略化若しくは様式化され、写実性に乏しい。

巨石人頭像の目をみると大体は目を開けていることが多い。一方、大型人頭像では、モンテ・アルト1, 5号記念物は目を閉じている。モンテ・アルト2, 6号記念物は、眼の部分を明確に表現しておらず、閉じているかどうかは不明である。コバタの巨石人頭像とラ・ベンタ78号記念物は半眼になっているようである。目は巨石人頭像では写實的に表現されていることが多く、殆どが二重に表現されている。大型人頭像ではセロ・デ・ラス・メサス2号記念物はやや写實的に表現されている。しかし、ラグナ・デ・ロス・セロス1, 2号記念物は方形になっており、メディアス・アグアス1号記念物は骸骨のように眼窩が開いている。トナラ地区大型人頭像やモンテ・アルト2, 3号記念物は楕円形になっているが、モンテ・アルト遺跡ではやや長方形になっている。また、ラ・ベンタ78号記念物の目はL字形をしている。巨石人頭像では、瞳の部分を円盤状に高くしたり、線刻して表現している。大型人頭像ではセロ・デ・ラス・メサス遺跡では線刻で表現されているが、他の大型人頭像では表現されていない。ただ、モンテ・アルト2, 3号記念物は線刻で表現されているような痕跡がみられる。巨石人頭像にみられる鼻は団子鼻が多いが、鼻と口の間は開いており、鼻下の表現がされている。しかし、サン・ロレンソ遺跡では鼻から直ぐに口が表現されるようにみえることもある。ラ・ベンタ3号記念物は三口のような表現がみられるが、破壊の跡も多くあり、確実ではない。一方、大型人頭像では、ラグナ・デ・ロス・セロス、メディアス・アグアス、モンテ・アルト遺跡においては眉間から鼻先までを三角形状につくられ、鼻先で膨らむ部分を表現している。このために写實的にはならず、塊状になる鼻がみられる。しかし、モンテ・アルト9号記念物の鼻は下端がやや広くなる棒状になる。大半の大型人頭像では

鼻下の表現が無く、鼻から直ぐに口が表現されていることが多い。セロ・デ・ラス・メサス、ラグナ・デ・ロス・セロス、メディアス・アグアス、テオパンティクアニトラン遺跡とメソアメリカ南東部太平洋側では鼻から直ぐに口になっている。次に口をみると、トレス・サポテス2基、サン・ロレンソ3, 4, 66, 89号記念物、ラ・ベンタ1号記念物は口を閉じているようであるが、他は口をやや開けている。開けている口の奥に歯が見えているのは、サン・ロレンソ2, 53, 61号記念物、ラ・ベンタ2, 4号記念物である。サン・ロレンソ61号記念物では6本の歯が表現されるが、他は4本の歯が覗いている。メキシコ湾岸のセロ・デ・ラス・メサス、ラグナ・デ・ロス・セロス、メディアス・アグアス遺跡の大型人頭像では口の部分に牙と歯がみえている。メソアメリカ南東部太平洋側では唇は写実的でなく塊状に表現されている。テオパンティクアニトラン大型人頭像とトナラ地区大型人頭像は唇が歪んで表現され、ジャガーの口のようなものである。

耳は巨石人頭像では写実的に表現されているが、メソアメリカ南東部太平洋側の大型人頭像では直方体状になっている。また、ラグナ・デ・ロス・セロス、メディアス・アグアス、トナラ地区では耳がない。セロ・デ・ラス・メサスでは、方形耳飾りが表現された上下には耳らしい表現もみられる。

一方、巨石人頭像の特徴としてあげられるのは、眉間の皺で代表される厳しい表情である。巨石人頭像では眉間の皺まで表現されていることが殆どである。しかし、トレス・サポテス記念物Aとコバタ巨石人頭では、眉間に角張った段差のみを表現している。大型人頭像ではモンテ・アルトで眉間の皺は写実的でなく棒2本を並べたような形になっている場合と角張った段差のみで表現している場合がある。この棒を2本並べたような眉間は、サン・ロレンソ3号記念物の眉間を更に簡略化したような形である。

また、大型人頭像の場合には、巨石人頭にはみられない装飾がある。セロ・デ・ラス・メサス2号記念物では、頬に刻線が彫られており、刺青などが描かれていたことを暗示する。また、刺青の可能性があるが、ラ・ベンタ78号記念物とモンテ・アルト9号記念物では耳のあたりの上下に伸びる2条の線があり、上下端では後頭部に向けてやや曲がっている。モンテ・アルト9号記念物には、この文様の中程に、他の大型人頭像や巨石人頭像に耳飾りとして表現される方形の文様が彫られているため、耳飾りの一部かもしれない。

### (3) 巨石人頭像と大型人頭像の特徴

巨石人頭像は、ヘルメット状頭飾りと耳当てで、大型人頭像とは区別できる。しかし、大型人頭像は、頭飾りを持つ例は稀であり、統一性もみられない。耳飾りについては、巨石人頭像と同じ方形の耳飾りが、大型人頭像でもみられる。また、巨石人頭像には無い円形の耳飾りが大型人頭像にはみられる。巨石人頭像にみられる勾玉と円盤が組み合わさった耳飾りの勾玉部分が脱落したものかもしれない。巨石人頭像の顔の表情は、例外はあるが、写実的に表現されている。しかし、大型人頭像の顔の表情は写実的とは言い難い事例が多い。眉間の皺に注目すると、巨石人頭像では写実的に表現されているが、大型人頭像では様式化されている。巨石人頭像には、コバ

タ1号記念物以外は目を閉じていない。しかし、大型人頭像では、ラ・ベンタやモンテ・アルトでは目を閉じている。

### 3. 巨石人頭像の意味

ここでは、巨石人頭像の意味を検討する。従来、巨石人頭像は、戦士、球技者、支配者、神などといった解釈がされてきた。

オルメカ文化において、戦士はどのように表現されているかを考える。戦士と確実に考えられる表現は無い。球技者についても、確実ではないが、ラ・ベンタ1号石碑にはスティックを持った人物たちが中心に居る人物の周りに数人いる。スティックを持つ球技者は他のメソアメリカの図像にも表現されることがある。しかし、彼らの頭飾りは、ヘルメット状ではない。支配者らしい人物が被っている頭飾りは、ヘルメット状の頭飾りはないようである。一方、ヘルメット状頭飾りが表現されている石彫を探してみると、ラ・ベンタ8～10号記念物に表現されている。これらの石彫は何れも胡坐をかいて座る人物像である。目の表現をみるとL字型になっており、普通の人とは考えられない。しかし、頭飾りと禪以外に装身具はみられない。このことを考慮に入ると、こうした人物はオルメカ文化において重要な位置にいた人物若しくは神聖な存在であると考えられるが、戦士、球技者、支配者といった特定の特徴を備えているとは言い難い。

一方、巨石人頭像に使われた石材は、直線距離でサン・ロレンソ遺跡から60km、ラ・ベンタ遺跡からは100km離れている(Williams and Heizer, 1965)。このため、組織的に石材を遠くから運ぶ必要があり、巨石人頭像に表現される人物は社会的に重要な地位にあった人物と考えられる。ところで、ポーターは巨石人頭像がテーブル状祭壇から再彫刻されたものであることを、サン・ロレンソ2,53号記念物(2,7号巨石人頭像)から説明している(写真5,6)。そして、巨石人頭像がつくりかえられる前の玉座を使っていた支配者の肖像である可能性も指摘している。また、巨石人頭像から壁龕を持つ石彫に再彫刻された可能性をイサパ2号記念物やタカリク・アバフ23号記念物から説明をしている(Porter, 1989)。一方、サン・ロレンソは低い土製基壇が立ち並ぶ大集落、ラ・ベンタは高さが30mを超す大きな土製ピラミッドを含む計画都市であった。サン・ロレンソでは東と西に巨石人頭像がある点を結ぶと、平行する2つの南北方向の軸をなしていたとデ・ラ・フエンテは考えている。ラ・ベンタでは都市の北端に巨石人頭像が並んでいた。こうした状況を考慮すると、オルメカの共同体を外から守る意味合いを持っていたことも考えられる。そして、玉座を作り直しているということを考慮すると、玉座を使っていた支配者が亡くなった後に、その支配者の肖像を使っていた玉座から巨石人頭に作り変えて、共同体を護るように都市若しくは集落の縁に置かれたということも可能性のひとつとして考えられる。

また、巨石人頭像から遅れてつくられた大型人頭像をみると、閉じられた眼をした大型人頭像もある。閉じられた眼をしている石彫を他に求めると太っちょの石像がある。これはメソアメリ

カ南東部太平洋側に多い石彫である。太っちょの石彫は、湧水点や湖の島からも出土している。水と関連した役割を担っていた可能性も考えられる。こうしたことを考えると、巨石人頭像は形を変えて、メソアメリカ南東部太平洋側で新しい文化の一要素となったとも考えられる。

### おわりに

メソアメリカ南東部でオルメカ文化が栄えた後に、発展する都市がカミナルフユである。沼沢地に囲まれたメキシコ湾岸とは異なり、緑豊かなグアテマラ高地にある。ここでは、太っちょの石彫が多くつくられている。カミナルフユ遺跡の古典期中期の建造物の墓より高さ24cmのとした眼をした小型人頭像が出土している。この人頭像の顔はモンテ・アルト遺跡などで出土している大型人頭像や太っちょの石彫の顔と同じ特徴を持っている。発掘者は、墓の上の梁が腐って崩壊したときに墓の中に落ちたと考えている。巨石人頭像から大型人頭像に変化し、最後は小型の人頭像になったが、先古典期中期のオルメカ文化の要素が、古典期まで生き延びた証なのかもしれない。

オルメカ文化が栄えた先古典期前中期から、初期マヤ様式を持つメソアメリカ南東部太平洋側をみる。オルメカ文化で始まった文化の要素が、メソアメリカ南東部太平洋側では新たな解釈がされて形を変えていることがある。巨石人頭像と大型人頭像の関係もそういったオルメカ文化の遺産という視点から考えることが出来るかもしれない。こうした解釈は、オルメカ文化とメソアメリカ南東部太平洋側の文化とを比較し、検証する必要がある。この小論が、オルメカ文化の広がりを考えるための一つのたたき台になれば幸いである。

### 参考文献

- Blom, F. y O. La Farge  
1986 *Tribus y Templos*. Instituto Nacional Indigenista, México D.F.
- Brüggegan, J. y M. Hers  
1970 “Exploraciones arqueológicas en San Lorenzo Tenochtitlán.” *Boletín del I.N.A.H.* 39, pp.18-23.
- Clewlow, C.W., Jr., R.A. Cowan, J.F. O’Connell and C. Benemann  
1967 *Colossal Heads of the Olmec Culture*. Contributions of the University of California Archaeological Research Facility 4, Berkeley.
- Clewlow, C.W. and C. William  
1974 *Colossal Heads of the Olmec Culture*. Contributions of the University of California Archaeological Research Facility 19, Berkeley.
- Coe, M.D. and R.A. Diehl  
1980 *In the Land of the Olmec: The Archaeology of San Lorenzo Tenochtitlán*. University of Texas Press, Austin.
- Cyphers, A.  
1994 “La nueva cabeza colosal en San Lorenzo” *Antropologicas* 11: 66-72.  
2004 *Escultura olmeca de San Lorenzo Tenochtitlán*. UNAM, México, D.F.

- De la Fuente, B.  
 1975 *Las Cabezas Colosales Olmecas*. Fondo de Cultura Económica, México.  
 1992 *Las Cabezas Colosales Olmecas*. El Colegio Nacional, México.
- Drucker, P.  
 1943 *Ceramic Sequence at Tres Zapotes, Veracruz, Mexico*. *Bureau of American Ethnology, Bulletin* 140, Smithsonian Institution, Washington, D.C.  
 1952 *La Venta, Tabasco: A Study of Olmec Ceramics and Art*. *Bureau of American Ethnology, Bulletin* 153, Smithsonian Institution, Washington, D.C.
- Drucker, P., R.F. Heizer and R.J. Squier  
 1959 *Excavations at La Venta, Tabasco, 1955*. *Bureau of American Ethnology, Bulletin* 170, Smithsonian Institution, Washington, D.C.
- Heizer, R.F., T. Smith and H. Williams  
 1965 "Note on Colossal Head No.2 from Tres Zapotes." *American Antiquity* 31(1), pp.102-104.
- Martínez D., G.  
 1985 "El sitio olmeca de Teopantecuanitlán en Guerrero." *Anales de Antropología* 22, pp.215-226.  
 1986 "Teopantecuanitlán." In *Arqueología y Etnohistoria del Estado de Guerrero*, editado por R. Cervantes-D., pp.55-80.
- Medellín Z., A.  
 1960 "Monolitos inéditos olmecas." *La Palabra y Hombres* 16, pp.75-97.
- Melgar, José María  
 1869 "Antigüedades mexicanas" *Boletín de la Sociedad Mexicana de Geografía e Estadística* 2: 292-297.
- Ochoa, L. and M. Castro-Leal  
 1986 *Archaeological Guide of the Park~Museum of La Venta*. Tabasco State Government, Villahermosa.
- Porter, James B.  
 1989 "Olmec colossal heads as recarved thrones" *RES* 17/18 89: 23-29.
- Ruiz Gordillo, O.  
 1982 "Nueva cabeza colosal en San Lorenzo Tenochtitlán, Ver." *Cuadernos de los Centros Regionales, Centro Regional de Veracruz* 1: 1-12.
- Schieber de L., C. y M. Orrego C.  
 2001 *Los Senderos Milenarios de Abaj Takalik, Guía del Parque*. Ministerio de Cultura y Deporte, Guatemala.
- Stirling, M.W.  
 1939 "Discovering the New World's Oldest Dated Work of Man" *National Geographic Magazine* 76-2: 183-218.
- Stirling, M.W.  
 1943 *Stone Monuments of Southern Mexico*. *Bureau of American Ethnology, Bulletin* 138, Smithsonian Institution, Washington, D.C.  
 1955 "Stone Monuments of the Rio Chiquito, Veracruz, Mexico." *Smithsonian Institution Bureau of American Ethnology, Bulletin* 157, pp.1-23.
- William, H. and R.F. Heizer  
 1965 "Sources of Rocks Used in Olmec Monuments." *Contributions of the University of California Archaeological Research Facility* 1, pp.1-39.

**Abstract**

## Esculturas de “Cabezas” en Mesoamérica.

Nobuyuki Ito

Existen dos tendencias escultóricas muy conocidas en Mesoamérica en la que se representan cabezas humanas, ambos estilos fueron realizados en formatos distintos: las cabezas Colosales y las cabezas Grandes.

La cultura Olmeca se distingue por haber plasmado una forma escultórica conocida como “Cabeza Colosal”. Esta escultura muestra como atributos distintivos la cabeza y el rostro de un personaje que porta un casco con dos protecciones sobre las orejas. Sus rasgos faciales son realistas, ojos almendrados, nariz corta y ancha, labios gruesos, ceño fruncido y otros caracteres. Por otra parte, en varias regiones de Mesoamérica, existen otro tipo de representaciones escultóricas que podría llamarse “Cabeza Grande”. Esta corriente escultórica se caracteriza por que el personaje no porta casco como el que se representa en las “Cabezas Colosales”, de igual forma mantienen una expresión facial menos realista y su tamaño es más pequeño que el de las “Cabezas Colosales”.

Referente a la distribución de las esculturas, las “Cabezas Colosales” sólo se encuentran en la región de Golfo de México a diferencia de las “Cabezas Grandes”, mismas que se distribuyen en varias regiones del Golfo de México, Altiplano Central de México y Costa Sur.

Se presume que en Costa Sur se esculpieron las “Cabezas Grandes”, modificando algunas de las características originarias que poseen las “Cabezas Colosales” del Golfo de México. Hasta el periodo Clásico Tardío continuó la tradición escultórica de las cabezas, convirtiéndose en otra forma escultórica representativa de la Costa Sur de Mesoamérica.



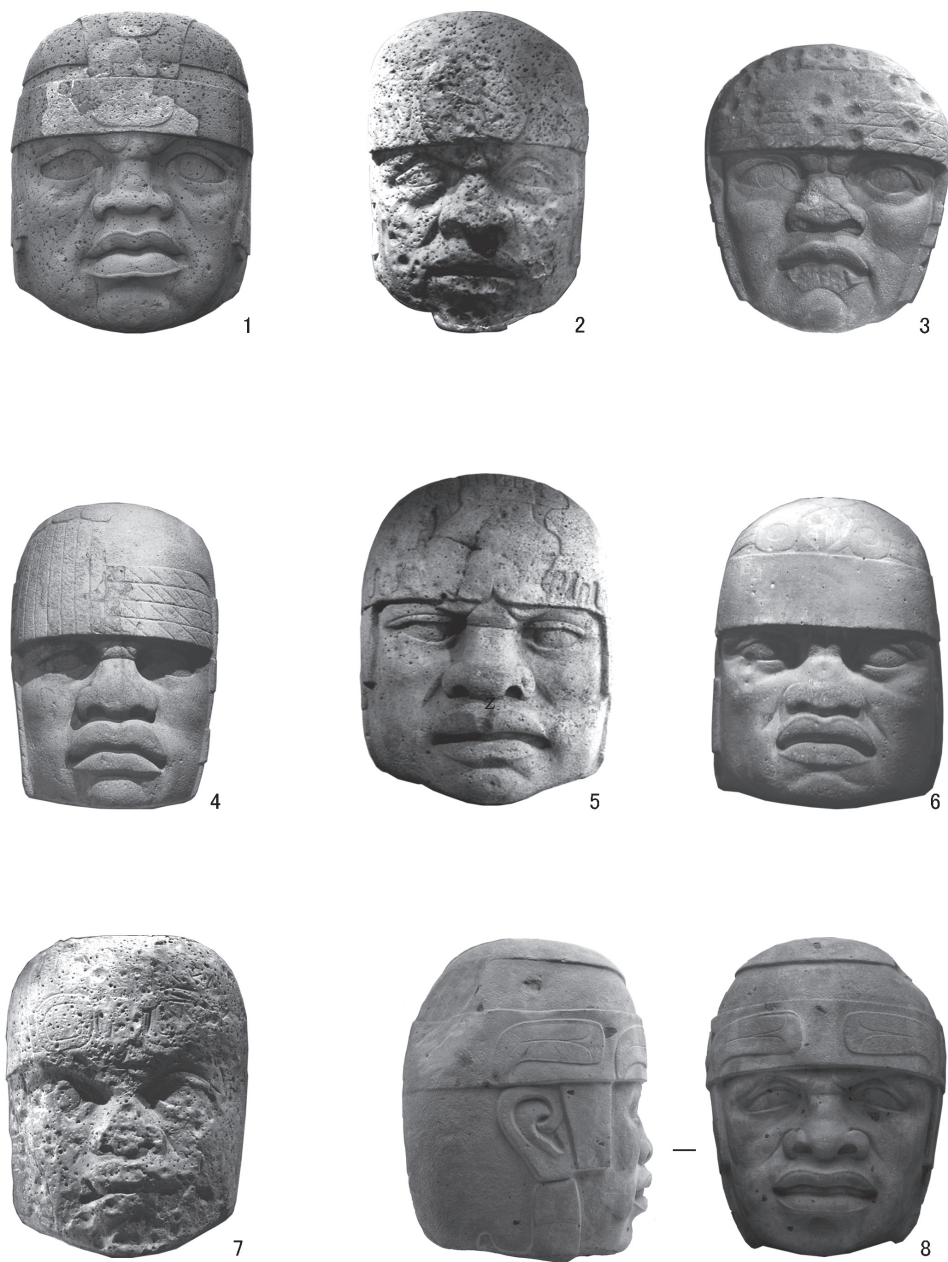


写真1 サン・ロレンソ遺跡で出土した巨石人頭像

1. 1号記念物、2. 2号記念物、3. 3号記念物、4. 4号記念物、5. 5号記念物、6. 17号記念物、7. 53号記念物、8. 61号記念物



写真2 サン・ロレンソ、ラ・ベンタ遺跡出土の巨石人頭像と大型人頭像

1. サン・ロレンソ66号記念物、2. 同89号記念物、3. ラ・ベンタ1号記念物、4. 同2号記念物、5. 同3号記念物、6. 同4号記念物、7. 同78号記念物



写真3 メキシコ湾岸出土巨石人頭像と大型人頭像

1. コバタ1号記念物、2. トレス・サボテス記念物A、3. 同記念物Q、4. ラグナ・デ・ロス・セロス1号記念物、5. 同2号記念物、6. セロ・デ・ラス・メサス2号記念物、7. メディアス・アグアス1号記念物



写真4 ゲレロ州とメソアメリカ南東部太平洋側出土大型人頭像

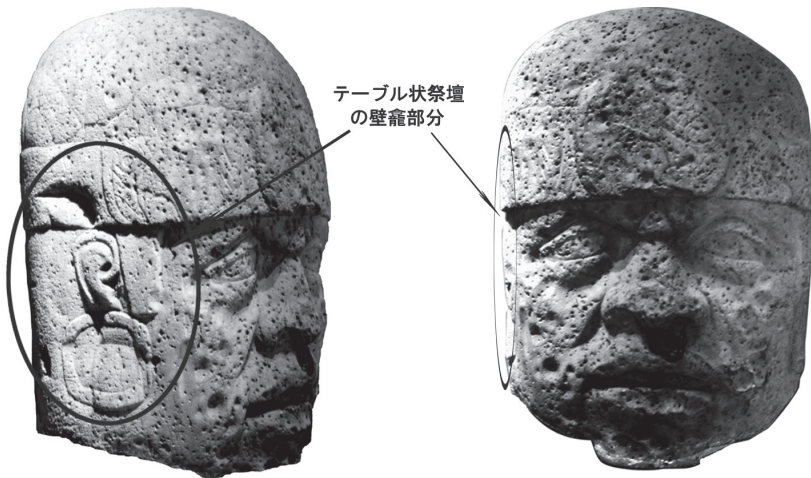
1. テオバンティクアニトラン大型人頭像、2. トナラ地区大型人頭像、3. タカリク・アバフ99号記念物、4. モンテ・アルト1号記念物、5. 同2号記念物、6. 同3号記念物、7. 同5号記念物、8. 同9号記念物



テーブル状祭壇（ラ・ベント4号祭壇）

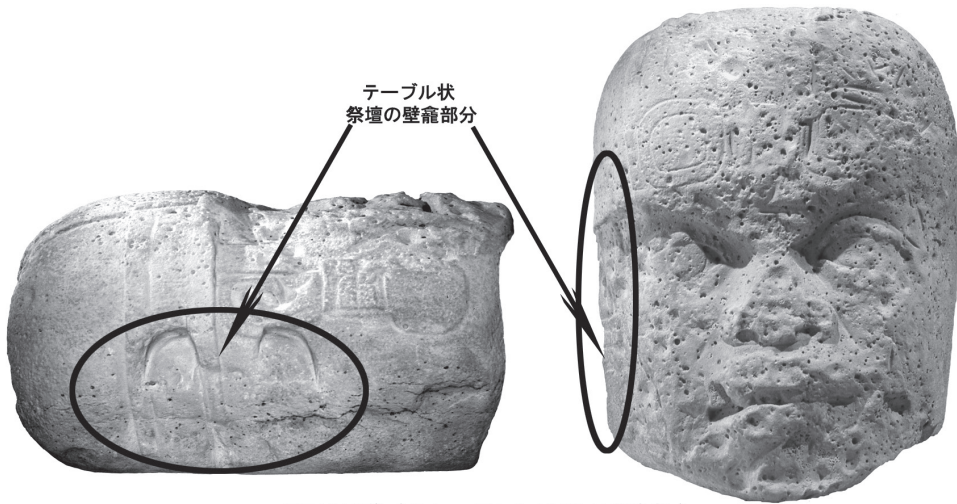


破壊されたテーブル状祭壇（サン・ロレンソ14号記念物）

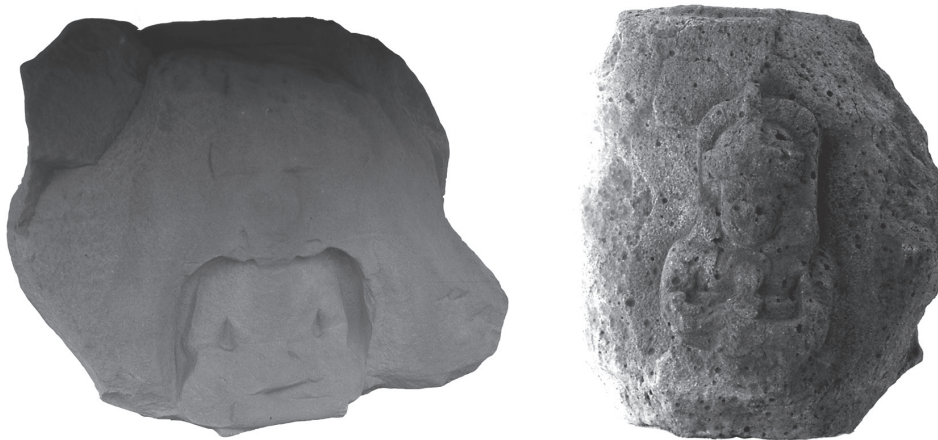


巨石人頭像（サン・ロレンソ2号記念物）

写真5 テーブル状祭壇の再利用と巨石人頭像



巨石人頭像（サン・ロレンソ 53 号記念物）



破壊を受けたテーブル状祭壇  
（左：サン・ロレンソ 20 号記念物、右：ラグナ・デ・ロスセロス 28 号記念物）

写真 6 巨石人頭像とテーブル状祭壇の破壊